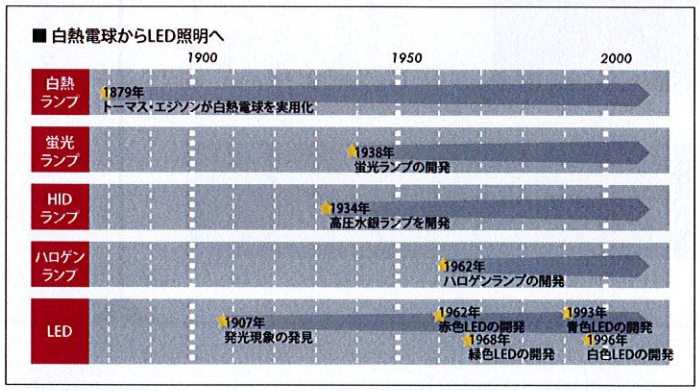
照明装置の歴史

LED照明講座 第2回

もっとも原始的な照明装置である石器時代のたき火に始まり、ろうそくや各種油・ガスを燃料とするランプを使用する近代に至るまで、照明装置は燃料を燃やして光源とするものが用いられていました。

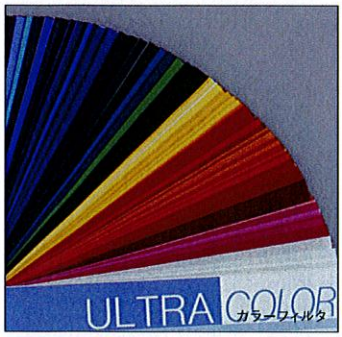
1800年代中頃にはフィラメントに電気を流し、光源とする電球が発明され、1879年にトーマス・エジソンが竹のフィラメントを使用した電球を開発、白熱電球の普及が始まります。1934年には高圧水銀灯、1938年に蛍光灯が、さらに1960年代初頭にはハロゲンランプが開発されるなど白熱電球よりも効率の良い光源がいくつも普及していきました。

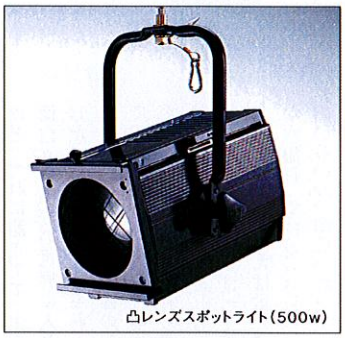
LEDの発光原理の発見は1907年になります。研磨剤として使用されるカーボランダムの結晶に電気を流すと発光することが発見されました。その後1962年には赤色LEDが、1968年に緑色LEDが開発されましたが、白色を出すのに必要な青色LEDは、まだ実用化されていませんでした。1993年に青色LED、そして1996年ようやく白色LEDが開発されました。LEDを使用した照明装置は、現在でも日々効率の向上やあかりの質を向上するため開発が行われており、その省電力性、長寿命性からますます普及が進むでしょう。



空の観測法
第二回「呼称」

連載コラム ／ 幸 和紀




凸レンズスポットライト(500w)

舞台美術をやりたいと口走って和栗由紀夫さんの好善社に転がり込んだものの、当時の私は「舞台」の「ぶ」の字はおろか、「ぶ」すら知らぬ学生で、暴挙である。アスベスト館や、今は無い渋谷のシードホールでの公演に「裏方手伝い補佐見習い」のように加わり、やたらと3m脚立を持って駆け回った。えてしてそれは照明を吊込む手伝いだったが、脚立の上のベテランが「そこの5百のトツを取ってぇ」などと大声を張り上げたところで、私にはそれが何を指し示しているのか、まるで解らない。いったい、5百とは何の数字で、そもそも「トツ」って何だ、と思った。「ひとつ」の聞き間違えかとも思った。全く役に立たない。

こうなると、照明の名前を憶えようと強く思うのも無理からぬことで、現場を観察しながら、多様な照明器具が何と呼ばれているかを密かに暗記し始めた。だが、これが私を混乱の只中に放り込んだ。あの「5百のトツ」から目を離さぬよう、朝から晩まで視線を張り付かせていたのだが、誰かがそれを「サス」と呼んだ。「トツ」はどうしたのだ。首を傾げた。そうするうちに別の誰かが、その「トツ」だか「サス」だかを「あのアンバー」とか云うのである。それに返事をした者に至っては「はい、和栗さんアテですねー」である。一つの器具の名前が一向に判然とせず、ことによると自分が馬鹿なのではないかと不安になった。

この不可解な呼称のカラクリに気付くには、かなり時間を要した。「人と同じ」だったのだ。「鈴木さん」が現場で「舞台監督」とか「ブカン」とも呼ばれ、「ズッキー」などと愛称で呼ばれもするが、それと同じことが照明器具には顕著に当てはまる。「5百の凸」が本名ならば、残りは現場の役割名か愛称だ。しかし、そう気付くまでに多量の照明カタログすら集めた私は、やはり馬鹿者かもしれない。

幸和紀(ゆき・かずのり)
株式会社テトラロジックスタジオ代表

『A4 NEO』

「Season 1 #002」

劇場の楽屋廊下に、小さなピクトグラムが居ました。女性トイレの扉の取っ手です。扉上部の壁面に、きちんと大きなサインが有るのに、コレが居ます。大きなサインのほうを見落として、コレで「あっ」と気付く男性はどれ程でしょうか。

思うに、劇場の裏方さんにはラベルプリンターの愛好者が多いのです。「テプ○」で有名な、あれです。裏方エリアでは大量の「テプ○」シールに出くわします。ところで、伏せ字で書くとなぜかアヤシイですね。

スタッフ控え室で、知人の裏方さんが「裏を見てよ」と、アルミの灰皿を指さしました。灰皿を裏返すと、煙草のピクトと数字を記した「テプ○」が貼ってあります。「そのシール作りが大好きな人が居てさ、貼る場所が無くなったら灰皿に通し番号を付け始めた」と、紫煙を燻らせました。

それなら、この女性ピクトを綺麗にしましょう。疲れてます、彼女。次はイブニングドレスを着たいらしいですよ。

（エキストラＭＣ）

ききみみずきんのあんな話こんな話

Matinée マティネ（仏）

昼間の公演を「マティネ」と呼びます。夜公演は「ソワレ」。

日本でのクラシックコンサートでは土・日曜のマティネが増え、ＮＨＫ交響楽団は年間54回の定期演奏会の内、土・日曜の18回は三時開演です。他の楽団でも、土・日曜は二時～三時開演が増えています。マティネが増えたのは自宅と劇場が遠いという住宅事情や、ライフスタイル、観客の高齢化が影響しているようです。演劇やミュージカルでは平日マティネが頻繁にあり、女性客と団体が多いようです。

欧米のミュージカル劇場での平日マティネは観光客向けです。

ドイツ・オーストリアの歌劇場や音楽ホールでの土・日曜のマティネは、青少年向けが中心です。観客の減少と高齢化の危機感で、将来の観客になる子供たちにアプローチしています。解説をつけたり、名作を子供向けにアレンジしたり、著名な指揮者が振る一流楽団に地元の子供の奏者を参加させたりと、新しいアイディアをどんどん出しています。

（ききみみずきんのＡ）

舞台照明はゲームの木
横原由祐 氏（その1）

照明家インタビュー

横原由祐（よこはら・ゆう）
舞台照明家。日本大学芸術学部演劇学科照明コース卒業。（株）シアタークリエイションに9年間所属、舞台照明家　齋藤茂男に師事。チーフオペレーターとして数々の舞台創作に参加。第30回平成22年度日本照明家協会賞 新人賞を「7ストーリーズ」で受賞。2012年に独立。

鴎座フリンジ企画　CLEANSED project 03 『洗い清められ』
2012年5月 @space EDGE　作:サラ・ケイン／構成・演出:川口智子
URL:http://kamomeza-fringe.net/pg49.html

編：照明家になられた経緯を。

横原：高校の頃は芝居ではなく、コンサートの照明に興味がありました。照明を学べる学校を探して、日本大学芸術学部の演劇学科に入学しました。そこで、野田秀樹さんや蜷川幸雄さんとかの舞台を観ました。で、面白いな、こんな世界もあるんだなって。映画でも何でも当時はＣＧ全盛期でしたけど、それに飽きてて、生身の面白さで演劇の世界に入りました。遊眠社で照明をされていた北寄崎嵩さんが日芸の先生で、さらに演出家の串田和美さん、その関係で照明家の齋藤茂男さんも来ていました。齋藤さんの明かりを見て、舞台照明ではない、例えば蛍光灯とか水銀灯、電球をバンバン使っているのが、面白いなと思ったんです。それで「興味があるなら来る？」と言ってもらって、齋藤さんの会社に入りました。

編：照明家を目指すために無駄なようで無駄ではないことって？

横原：電気の仕組みは絶対的に学んでおくべきです。知識は持っているべき。それから、作品づくりに参加するから、戯曲を演劇的にどうするかという読解能力。シェークスピア作品なら、その時代背景とかを絶対に調べるようにしています。当時の夜とか、人々の心情や所作事はどうだったのか、とか。キリスト教にしても、歴史や宗派で様々ですよね。出会った作品に焦点を絞って調べています。無限に調べることがあるけど、そこから何を選択して照明に反映させるか、と考えます。演出家と喋るときも、調べたことを話して「作ってみました」と。絵を作るのは感覚だけど、そういうロジカルな発想も必要。僕は芝居畑だけど、そういう知識が重要だと思っています。

編：戯曲と演出以外で常に照明プランの手掛かりにするものは？

横原：空間をすごく意識しています。小屋によって観客に伝わるものが違うんです。演出と戯曲と空間の三つが大事ですね。戯曲と演出が同じでも空間が違えば、伝わるものは異なりますから。

編：最近の仕事で面白かったものは？

横原：佐藤信さんの鴎座に所属の川口智子さんという演出家が、サラ・ケインの作品を使った『クレンズドプロジェクト』というのを２０１０年からやっていて、声を掛けて頂いてます。２０１２年は５月に上演です。会場は渋谷のスペース・エッジという、芝居小屋ではない小スペースです。掘っ立て小屋のロビー、コンクリートの床、役者の身体と言霊だけで芝居を成立させようという試みで、刺激があります。

（続く）

［発行］東芝エルティーエンジニアリング株式会社　アートライティング事業部　アートライティング営業部　開発営業担当
〒140-0004 東京都品川区南品川 2-2-13（南品川 JN ビル）TEL:（03）5479-2277
〒541-0043 大阪府大阪市中央区高麗橋 4-3-7（北ビル 6F）TEL:（06）6208-6111
http://www.lte.co.jp/
［発行日］2012 年2月15日
［編集］株式会社テトラロジックスタジオ［デザイン］小澤学

※本誌記事・写真の無断転載を禁じます。